

これから様々な選択をしていく 進学内定者へのエール

青木 優 (進学情報センター)

今年度も進学選択における内定者が第二段階まで確定し、第三段階内定者決定を迎えるのみとなった。昨年度から『進学振分け』から『進学選択』と名称が変わったが、内定者の決定方法も変遷している。特に今年度から第二段階の内定先決定には『受け入れ保留アルゴリズム』を採用した。駆け引きの要素をなくしたことで、学生にとってより公正な方式になった。しかしながら、評価尺度に成績が重要視されることには変わりなく、もともと第一に希望していた先とは異なる進学単位に内定した人たちもいると思う。勿論、納得していない人たちにとっては1月に進学内定の辞退をする権利は有しているのだが、「折角内定したのだから・・・」と悩んでいる人もいるはずだ。こういった迷える青年羊¹達にとって参考になるような話はないものかと思ひ、後期課程に進学した当時の我々を回顧してみた。これより、基礎科学科第一出身者プラスαの群像劇を(多少の思い違いや脚色は入っているかもしれないが)開陳してみるのだから、進学先が決定したことで必ずしも進路が狭まったわけではないと思っていただければ幸いだ。当時は、学科の大先輩である大隅良典先生も助教授としていらしたのだが、登場人物としては出てこない。(同じ舞台にいたのだと、ちょっと自慢したかっただけである)

その一、青木(つまり私)の場合

忙しい、とにかく忙しい。授業は必修が多いし、実験もある。新しく入った本郷系のテニスサークルにも顔を出さないといけない。塾講師のアルバイトも始めたし、兎に角、優先順位を決めよう。実験には必ず出なければいけない、演習も必須だ。講義は、まあ適当(『ちゃらんぼらん』という意味ではないので誤解なきよう)に出る。空いたところにサークル活動を入れて、という具合にスケジュールが隙間なく埋まっていく。後期課程に進学したら勉学に勤しむぞという誓いは何処へやら、相も変わらずマルチタスクな僕だった。そして6学期(今の3Aセメスター)、僕の進路を左右する授業が待ち受けてい

た。『外国語論文購読』という、希望する先生と数人の学生で外国語(普通は英語)の論文や学術書を輪読するという内容だ。先生の選択は、ほとんど学生の希望通りに叶う。先生一覧を見て僕が目をついたのは、1年の時『量子化学』と『化学熱力学』を講義して頂いた原田義也先生だった。5学期に『分子構造論』という授業も受けた。輪読内容(分子分光光学の教科書)もさることながら、1年の時から知っているという親近感も手伝い、登録をした。こうして僕を含め三人と原田先生との輪読が始まった。この、週に一度の行事は僕に今までにない極度の緊張を与えた。英語が不得意という理由からではない。ちゃんと理解しているかどうかを常に問われるからだ。先生「この箇所はどのような意味なのかな」、学生A「ごによごによ・・・」、先生「それ本当?○○君はどうかな」、学生B「(とぼっちりが飛んできた) えーっと、○○ですかねえ・・・」、先生「では、もう少し基本的な所で○○は解るかな」という具合である。要は、解っているようで解っていない、霞んでいたような箇所が徹底的に洗い出され、『理解』までもっていく。そうすると、記述の中でもし誤った箇所があったら、自信をもって『正しくは』と主張できるようになる。研究への階段の一步目である。成長の遅い僕の場合、半年では取っ掛かりに触れただけだったが、意欲は十分に掻き立てられた。加えて、学期の終わりには研究室の実験装置を使用して、研究試料の測定までさせてもらった。僕にとっては高い玩具を与えられたようなもので、緊張感を持ちながらも喜び勇んで操作していた。こうなるとあまり変化を好まない僕は他の研究室に目を向けることが無くなってきて、進路がほぼ決まってしまったのだ。「そうだ!原田研究室に行こう!」決めた後に先生のことをいろいろと調べると、今年から(1991年)学部長になった偉い先生であること、残り3年で定年退官されてしまうことなど驚かされるネタが出てきたが、「まあ、なるようになるさ」と思うだけの僕だった。原田先生のことについては、いくつも話ができるほど様々な重大事に携わった大人物であるのだがそれはまた今度書くことにしよう。

その二、一緒に輪読をしたX氏の場合

その後、僕を含め二人はメインストリームに乗った形で卒業研究は原田研究室へ所属し、大学院試験にも無事通り、修士課程を過ごすことになった。しかし残りの一人、X君だけは進路が異なった。今はどういのかかわからないが『文系就職』、つまり大学院に進まずに理科の知識を（あまり）使わない職業に就く、ことを目指していたのだ。まだバブルがはじける前の時代、比較的売り手市場だったのもあり、あらゆる方面からアプローチがあった。X君は確かアメフト部に所属していたと記憶しているが、文理問わず様々なOB、OGに接触できる機会があったのだろう。大学院に進むことを決めていた僕でさえ、「サークルの先輩が晩飯を食べさせてくれる」という甘い誘いに乗って銀行の話聞きに行ったこともあるくらい、キャリアー選択の幅は広いのだ。X君は無事就職先を決め、（僕達とは違う研究室で）卒業研究を滞りなく遂行し、実社会の舞台へと旅立っていった。基礎科学科第一は、理学部色の濃いところだったが、それでも卒業生の進路はバラエティに富んでいた。青年海外協力隊に応募してアフリカに行ってきた強者も同期にいる。後期課程を過ごしていく中で自分の指向や適性などを鑑みることが当然で、それがたとえメインストリームに乗っていないとしてもそれまでの経験が無駄になることは決してない。因みにサークル仲間でも、宗旨替えをした人は結構いる。航空宇宙工学の修士課程まで行って医学部を受け直した人、物理学で素粒子研究のため博士課程まで行っていたのに司法試験に挑戦した人などだ。皆、早い遅いは関係なく、然るべきタイミングで『進路選択をし直した』に違いない。

その三、野球部に所属していたY氏の場合

当時野球部はもがいていた。東京六大学リーグの中で如何に戦力不足だとはいえ、1987年秋に199勝目を挙げて以来、1990年になっても連戦連敗、記念すべき200勝を達成できずにいた。その野球部で三年生当時すでに主力選手として活躍していた（レギュラーだったかどうかは記憶にない）Y君は、如何にも野球部といった体格と風貌を備えていた。やはり花形運動部の宿命であろうか、平日休日問わず練習や試合が行われるので、学科の授業は必要最低限しか出ていなかった。しかし、その最

低限の顔見せであっても彼の存在感は際立っており、怖さ半分、興味半分で仲良くしていた。そして、僕も含めてバラエティに富んだ友達と互助活動を行いながら順調に単位を取得していったと思う。そして僕たちが4年の春のリーグ戦、立教大学との対戦で遂に長いトンネル（70連敗）から抜け出し、通算200勝目を達成した。僕たちが大学に入って初めての勝利、皆がお祭り騒ぎだった。そしてリーグ戦が終わった夏、大学院に進学希望の僕たちは入学試験を受験した。1991年当時、基礎科学科第一直上の大学院組織は現在の総合文化研究科にはなく（1994年に広域科学専攻が組織される）、『理学系研究科相関理化学専攻』だった。そしてその受験会場にY君の姿はなかった。彼は、同じ理学系研究科でも『天文（学）専攻』を受験していた。僕にはこの発想がなかったのだが、大学院は学内外に門戸が開かれているから当然受験することはできる。そして、天文学は数学と物理がベースとなっている学問なので、基礎科学科第一開講の授業をきちんと理解していれば、かなりの部分をカバーすることが出来る。しかしながら、つい最近までほぼ野球漬けの毎日だったY君が華麗なる轉身を目指しているとは、とただただ感心するばかりだった。見事合格したY君はその後そのまま博士課程まで進学し、研究者への道を歩き出していった。運動部に所属しているからといって学問や研究の道から遠ざかっているということは決してない。引退してから、その体力と集中力を存分に発揮し、大学で活躍している人も多い。そういえば、その一で登場した原田先生も学生時代はボート部に所属していたはずだ。Y君が天文学を志向していたのがいつからなのかは分からないが、『為せば成る、為さねば成らぬ何事も』の言葉通りである。

さて、三者三様同時進行の群像劇、いかがだったでしょうか。文字通り、同じ学科に所属している学生であっても全く同じ環境にあるわけではないので、一人一人が違った経験を辿っていくことが分かるであろう。これから先、内定した所で何が出来るのか、出来ないのか、何がしたいのか、少し時間をかけて考えてもよいのではないだろうかと思う次第である。